

ヤッフォのアンドロメダ伝説の海岸で、大都会テルアビブ方面を見納めてから、バスに乗り、南下し、1時間半ほどで、ネゲブ山地へ入り、ベエル・シェバに着きました。

アブラハムは大都会であったハランを出て、「行く先を知らないで」旅を続け、ネゲブのベエル・シェバを、此処と定め、住むようになったわけですが、今回のバスの車窓からイスラエルの土地を眺め続けてみると、ベエル・シェバは辺境という言葉が当てはまるような気がします。緑地が残る最南端の台地がベエル・シェバでした。アブラハムは辺境を目指して生きた人だとつくづく感じました。



アブラハムの井戸

アブラハムは先住のアビメレクと井戸を巡る争いを平和におさめ、その誓いを交わした井戸を証拠とし、ベエル・シェバとその地を命名しました。(創21:31) また、ベエル・シェバに一本のぎょりゅうの木を植え、永遠の神、主の御名を呼んだ(創21:33)



ギョリユウの木

と記されています。近くに古代の遺跡があり、地表に現れているのは紀元前10世紀以降の住居跡とすることで、祭壇もありました。考古学の発掘が盛んにおこなわれているようで、遺跡も整備されていました。展望台からネゲブ一帯を眺めることが出来ました。ベエル・シェバは灌漑が進み、緑の野が北、西に延びていました。この展望台でツアーのガイドをしてくださった西郷氏がベングリオンという言葉「新しい道は過去から学ぶ」に触発され、歴史に興味を持つようになったと熱く語られました。

再びバスに乗り込み、ネゲブから東に向かい、死海へと進みました。大地は低い灌木が生えている土地から、ごろごろした石がむき出しになった山地へ、次第に乾燥した茶色の岩石の山々へ、練って進むようになりました。その山肌の色は、見たことがないほどの茶色で、一見もろい土のように見えますが、岩塩でゴツゴツした固いものでした。それが幾重にも重なっているのです。ロトの妻の塩柱と言われる素敵なスポットも見て、山道を3時間ほど下ったところが、エン・ボケク、海拔マイナス420m、塩分含有率が33%の死海のほとりでした。荒涼とした茶色の山と静かな死海は異様な空間でした。死海の水量は激減しているそうです。生き物が住めそうにないと感じるほど乾燥した風土ですが、灌漑がしっかり行われていて、そこはオアシスのようなリゾートになっていました。少し雨模様でした。気温は18℃とのことでしたが、さっそく「浮遊体験」を勧められ、寒いんじゃないの？ 恥ずかしいわ！ と言いながらも水着になりました。ホテルのプライベートビーチが工事中でしたので、オープン・ビーチまで歩いて行きました。その時、空に虹を発見！



死海のホテルの前で

お日様が出てきたのです。私はすぐにノアに与えられた「雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」(創9:16)との祝福の言葉を思い出し、この旅が祝福されていることを信じました。同時に同行の友人の亡きご夫君が天で共に喜んでおられると確信しました。二人で手を取り合い、少女のように飛び上がって喜びました。

すぐ向こうはヨルダンという国境の地、死海の水はぬるぬるした感じでした。興奮していたためか体に水を掛けても寒くは感じませんでした。あわてて準備体操をして、水に寝て、浮いてみました。とりたてて変わったことをしている感じはありませんでした。指に水をつけて舐めてみると、塩辛さと苦みがありました。その後、ホテルの死海温水プールに戻り、浮いて遊びました。